「好奇心」モノづくりの原点

上野彦馬とその時代

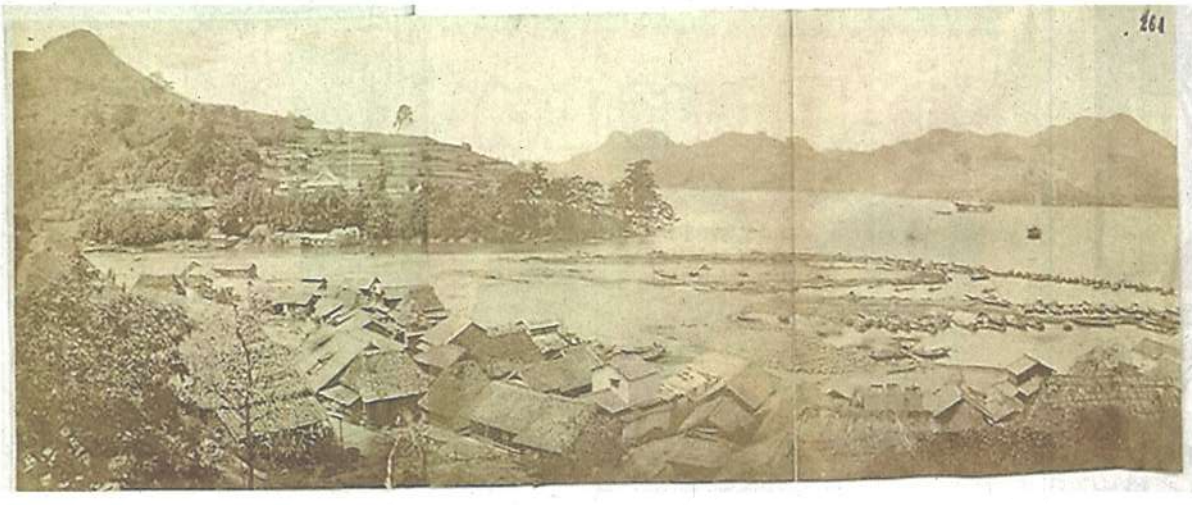
姫野順一

③ 撮形術との出合い

De nieuwste ontwikkeling der photographie en stereoscopie.

A. Drooge bewerking. B. Snelbeelden. C. Heliographie, photogalvanographie, lithographie, zincographie. D. Gebruik van den stereoscoop gemaakt. E. Photographie in natuurlijke kleuren. F. De photographie op de wereldtentoonstelling.

「発明・工芸品・工場の書」に掲載されたダゲレオカメラの撮影風景



居留地埋め立て造成中の大浦（ピエール・ロシエ撮影 1860年 PRO ロンドン）

蘭学

安政3（1856）年夏、上野彦馬が、長崎北馬町の渋谷英三を修業中の咸宜園に紹介した記録がある。その暮れの11月（旧暦）、廣瀬淡窓の葬儀における弟子の部に彦馬の名前はない。その直前に3年有余の日田での修業を終えて長崎に帰郷したようである。

漢学修業で一段と成長した18歳の彦馬が次に志したのは、父俊之丞が創設して死後閉鎖されていた、硝石精錬と中島更紗（染織）の復活だった。そのためには蘭学と、なかでも蘭舎密学（化学）の習得が必要であった。

そこでまた木下逸雲の紹介により、父の親友で蘭大通詞の名村八右衛門（号・花蹊）に入門し、蘭語を学んだ。蘭学の素養は漢学と共に彦馬の基礎学力となる。明治初期のジャーナリスト福地源一郎はこのとき名村の養子で共に学んだ。

対外危機に直面する幕府は、安政2（1855）年10月、長崎奉行所西役所で第一次海軍伝習所を開設した。幕府に献上する蒸気船スンビン号で長崎に到着したオランダ人の医学・理学教官ファン・デン・ブルークは、伝習所で物理化学と工学、軍事学、軍艦操練学を教えた。

ブルークはまた、鹿児島藩主島津成彬から福岡藩主黒田長博に贈られたカメラを持参して伝習所に入門し、写真修業をしていた前田玄造や、精錬方の古川俊平、長崎の蘭医吉雄圭哉らに写真術を教えた。ブルークの写真術における貢献は、実技ではなく理論であった。

ブルークから砲術や築城術、舎密を学んだ学生に、津の藤堂藩から派遣された堀江鍬次郎がいた。

彦馬の舎密修業の願望に応えたのは、ブルークの後任ポンペ・ファン・メーデルフォルトであった。ポンペと松本良順が開いた医学伝習所の「登録人名小記」には彦馬の名前がある。ここで知り合った堀江は、佐賀藩の中村嘉助と共にそれぞれの藩主に働きかけて資金を得て、舎密試験所というポンペの私塾開設に成功している。

彦馬もここに入塾し、蘭化学書を読みあさる。晩年の回顧談「日本寫眞の起源（三）」（「東洋日の出新聞」明治35年4月10日西郷四郎のインタビュー）によれば、蘭書を読んでいるうちにフォトグラフィーという語を見つけて、教師のポンペに尋ねたところ「是は我阿蘭陀抔では盛んに行われている術で、神羅万象此器械に掛ければ写し取れぬものはない不思議な術である」と教えられた。「それは面白いだろう、一つやってみろ」と行ったのが「今日寫眞の元祖となった訳である」と述懐している。好奇心がモノづくりの原点であった。

この時、彦馬が目にしたフォトグラフィーは、蘭書の「発明・工芸品・工場の書」の第1巻、あるいはフランス語の図入りカタログ「全写真器具の時価」ではなかったかと思われる。彦馬はフォトグラフィーを「撮形術」と訳した。

魔法

彦馬と堀江は、ポンペの助言を受けて器械と薬品作りに取り組んだ。暗箱（カメラ）は双眼鏡のレンズから、種板のビードロ（ガラス）はすぐ用意できたが、それに塗るコロジオン溶液作りが大変であった。アルコールはオランダの酒ジュネバーから。硫酸は硫黄と硝石を六日六晩焼いて作り、アンモニアは牛骨を土中で腐敗させ、青酸カリは牛の血を天日で乾かして精製した。

しかし、悪臭で奉行所に訴えられ、キリシタンの魔法とうわさされる始末であった。印画紙として、紙に食塩水と硝酸銀を塗り、卵の白身でコーティングする鶏卵紙も手製であった。

黒変

このような幼稚なカメラと薬品では、光線の感色性が悪く人肌は黒変する。そこで松本良順先生の試し撮りでは、先生の顔に白粉をベッタリ塗り、撮影には5分を要したという。手製の不完全な器械と薬品の問題は、スイス人写真家ピエール・ロシエとの出会いで明確になる。

ロシエはイギリスの理科学写真材料店で、写真雑誌を販売していたネグレッティ・アンド・ザンブラ社が、軍事的に緊張する中国・日本に特派した職業写真家であった。ロシエは、日本の写真黎明期における実践的な写真術の祖となる。

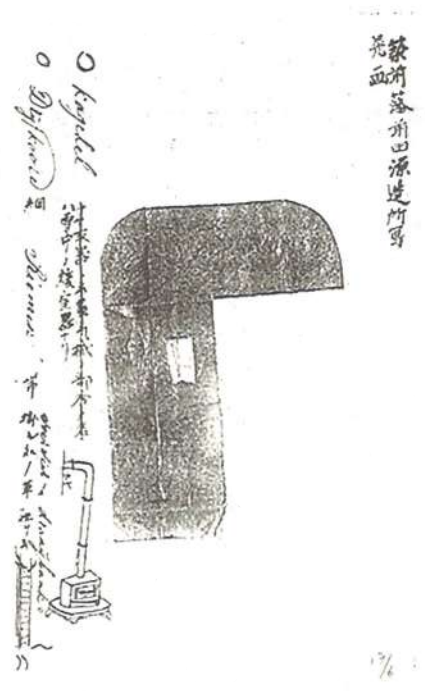
万延元（1860）年春から夏にかけて長崎に滞在したロシエは、前田玄造、古川俊平、長崎の時計師永野園助らに実際の写真術を伝習した。筑前藩に残る「洋学雑記」には「晃（光）画ハ舎密家ノモノナルガ西洋ニ於テハ此術ヲ以テ業トスルモノアリ、当八九月ノ間Frankiik Loziel ト云モノ紀陽ニ来リテ此業ヲ前田氏ニ伝フ」と記してある。玄造が写し出した「晃画」はまだプリミティブ（原始的）なものであった。

ロシエは造成中の外国人居留地を、条約に基づく建設の証拠写真として撮影し、英領事館に納めた。長崎に再来したシーボルト父子や、諏訪神社神官中島広足、松本良順などの人物や、開国直後の万延元年の長崎の港と町の風景を撮影している。ロンドンで販売されたステレオ写真集「日本の風景」第1、第2集の3D（立体）写真は、開国した〝神秘の国〟日本の欧米に向けた初期の湿板写真群だった。長崎の写真は第2集に収載されている。

良順はロシエを英人と記し、彦馬は仏国写真師と認識していた。しかし、実はスイス人であることが、イギリスの日本写真史研究者テリー・ベネットにより近年明らかにされた。

ロシエからヨーロッパの写真術を直伝された彦馬と堀江は、手製器械と薬品の未熟さを知る。堀江は、藩主の藤堂高猶に写真の効能を説明して150両を獲得し、出島のオランダ商人アルバート・ボードインからフランス製カメラとイギリス製ダルメイヤB三類レンズ、それに高精度の薬品を入手した。さすがに外国製で、彦馬は回顧談で「本物丈に大層善く出来る様になった」と述懐している。

この縁で彦馬は藤堂藩に召し抱えられ、文久元（1861）年3月、堀江と共に江戸の藤堂藩中屋敷（神田和泉橋）に出仕した。



前田玄造が撮影した「晃画」（「洋学雑誌」に掲載）

（長崎外国語大学長）

＝偶数月の第3日曜付サンデーぶんかに掲載＝

長崎新聞 2022（令和4）年8月21日掲載